

夫婦

家事、介護は当たり前と自ら実践している2人の男性も
始めからそうではありませんでした。

互いに助け合い支え合う2組の夫婦の姿は、
人生をどう生きていくのかヒントになりそうです。



久江さんを囲んで皓一さん(左)と弟の博さん(右)

母の介護で多くのことを学ぶ

影山皓一さん(浜松市)

妻、倒れる

影山皓一さん(五十七)さんは浜松の生まれ。一人暮らしの母・久江さんがアルツハイマー病になった当初、東京で出版社に勤務していました。そのため、看病は浜松に住む実妹と、週末に妻のサキさんが東京から看についていました。ところが病状は悪くなる一方だったため、思い切って三十年以上勤めた会社を辞め、浜松に戻ることにしました。五十四歳でした。

「父親が早くに亡くなったので母には苦勞をかけていました。一緒に住もう、それだけで介護だと思いました」。

同居してからも、皓一さんは資格取得の勉強に精を出したため、介護は妻のサキさんが一手に引き受けていました。「一年ほど経ったころ、妻が突然脳内出血で倒れました。救急車で運ばれる姿を見て死ぬんじゃないかと思いました」。

夫婦二人三脚で介護

幸い、サキさんの病気は軽くて済みました。皓一さんは介護をサキさんに任せっぱなしだったことを反省、家事や介護に積極的にあたるようになります。実際に介護してみると、トイレの介助、ベッドから助け起こす、着替えなどなど力の要る場面がたくさんありました。「女性だけでは無理ですな。肩痛めますよ」。

一緒に住むだけではだめだ、手も出さなければと、皓一さんは介護の大変さを思い知りました。

介護保険制度がスタート。徘徊のあった母・久江さんは介護認定三となり、デイサービスやショートステイの利用で介護がずいぶん楽になりました。

「元氣なころの母は、明るく外交的で氣丈な人だったから『息子の世話になどならない』って言ってた。それだけに、病気になることは母自身が悔しかったはず。イライラして私に当たるんです。こっちもつい暴力的な言葉を返してしまつて。血のつながった親子の辛さだね」。

皓一さんは介護の前面に立っていました。浜松に帰つてからの介護の三年間を振り返って、皓一さんは「本当に妻はよくやってくれた」と言います。サキさんは「『介護』と身構えるのではなく、当たり前のように周りが手を差し伸べてあげればいいと思います」

お互いをまよ言える

家事・介護

家事をやるのは当たり前

井口美代司さん(七十五)は、十年前に直腸ガンを患い闘病生活をしたことがあります。妻の露子さんは真冬に毎日病院に通いました。ところが、平成十三年春、露子さんが病に倒れます。夫婦二人の生活。今度は家事と妻の看病を美代司さんが担うことになりました。

「男の人って家事をあまりやらないよ。うだが、いずれいやでもやる時が来るんじゃないの。私は若い時戦争を体験しているから、何だつてやれちゃうよ」

家事をやるのは当たり前——という気持ちです。

五十年目のプレゼント

露子さんが入院中の今、出かける時の「行ってくるでな」の声かけも相手がないので、言えません。「寂しくて呆けそう」と言う美代司さんの健康法は、植木の剪定と軟式テニスで体を鍛え人とふれあうこと。

露子さんの退院日はもうすぐ。今年が結婚五十周年。子どもや友人が集って快気祝いも兼ねた会を開く予定だ。「妻には家でのんびりしてもらいたい。家事はわしが全部やるでつて妻に言いますよ」

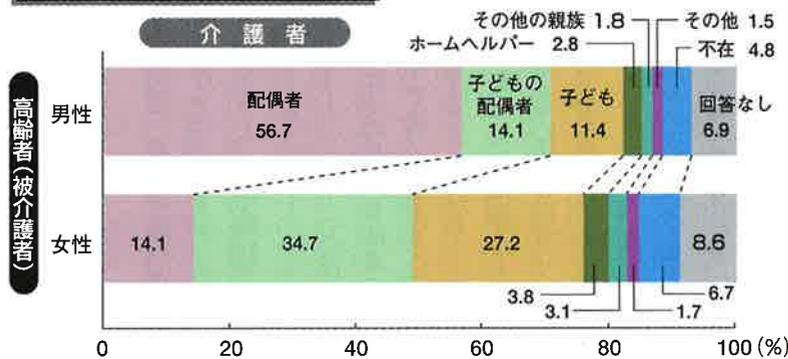
五十年という長い夫婦の歴史が、無理なく自然に助け・支え合う対等な関係を作り上げている。

ともに助け合い支え合う、いい関係

井口美代司さん(浜松市)

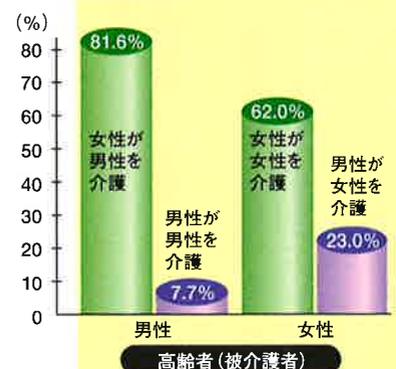


在宅要介護高齢者の主な介護者



資料出所: 高齢者実態調査(平成13年度) 静岡県健康福祉部 長寿健康政策室

介護者の性別



「自分の人生の中に、介護をスムーズに受け入れるには、今、何をしたらいいのでしょっか?」という問いに、江戸っ子独特の歯切れの良い答えが返ってきました。

静岡県立大学看護学部長・教授

佐藤 登美 さん

介護に「負のイメージ」を持たないで

「若い」から学ぶことは
たくさんあります。
人を介護するということは、
自分が育てられている
ことと同じなのです。



あなたは、どちら?..

例えば突然、身内の誰かが倒れ、介護が必要になったとします。そこで改めて周りを見回すと、実の娘はそばにいない、息子は働き盛りで忙しい。そこで嫁の出番となる。「えっ、私?」と戸惑う余裕もなく介護はその日から始まってしまいます。疑問や不満、不安だらけの毎日。「なんで、私だけこうなのよ!」と貧乏くじを引かされたように思う人、対象となる相手に手荒に接したり、虐待に向かう人、そうかと思えば、介護を通じてその尊さに気づきだす人もいるわけです。

介護者のタイプはおおよそ二通り。不平不満を口にするタイプか、かけがえない経験だと思えるタイプか。この差は何だと思えますか? 環境の良さでも何でもない。実は、その人の生き方にあるのです。

一生懸命、丁寧に生きる

良い介護が出来る秘訣は、その時その時を「一生懸命に生きること」に尽きます。三十代なら三十代の、四十代なら四十代の人生を、フリでも、ごっこでも、もどきでもなく、真剣に生きることです。



静岡県立大学看護学部長・教授

佐藤 登美さん

昭和61(1986)年

静岡県立大学短期大学部看護学科教授

平成6(1994)年

札幌医科大学保健医療学部看護学科教授

平成10(1998)年

静岡県立大学看護学部看護学科教授

平成13(2001)年より同職

専門は成人・老人看護学。
職場以外でも地域で高齢者を
対象とするケアの
ボランティア活動を行ってきた。

それともう一つ、現代人は効率とか要領を求め過ぎです。このようにむやみに省略化すると、必ず大切なものが抜け落ちる。「手を抜くことは心を抜くこと」につながると思います。

いつも精一杯に、そして丁寧生きてきた人は後悔が少ないのではないかな。何に対しても不完全のままだと、自分の意に添わない人生が続いて「こんなはずじゃなかった」というところに追い詰められてしまう。

また普段から、人の悲しみや痛みに鋭敏であること。そういう心がけを積んでいれば、介護の予行トレーニングなどはいりませんよ。

何かがおかしい今の日本人

ある家庭の話です。「家で介護なんて出来ませんよ！うちには受験生がいて本当に困るんです。ゴタゴタしたら大学落っこちちゃうかもしれない」とおっしゃる。これっておかしくないですか？
一つ屋根の下に暮らしているおばあちゃんや孫の勉強を心配する。つまり今の日本は、おばあちゃんよりも十代の孫の将来が優先される。いつから日本は、こんなふうになったんでしょうか。まったく寂しいことですね。子どもに「人の死に様」を見せることは大切なことなんですがねえ。

「システム」と「心」が間に合わない！

介護保険制度も開始されました。今の問題は、予想を超えて加速する高齢社会に、「人的なサービステル」と「人の心」が追いついていないこと。北欧やらのシステムを真似するよりも、早く自分たちの周りの社会作りや真のマニュアル作りを進めるべきです。

ケアする人のケアがないのが問題

介護する本人が、気持ちを切り替えても、なかなか持続できないのは、「社会からきちんとして評価されない」ということがあります。先ほどの嫁の立場の女性にしたって夫や親戚、周りの人たちから応分な評価があれば、「貧乏くじが孤軍奮闘」というふうにはならないかもしれない。
これからは、男性の自覚や協力も不可欠。ただ、「私はこんなに大変だ！」とグチをストリートに言っても逆効果。やたらに訴えるよりも、相手に分かるように表現する工夫や、うまく巻き込んでいく。自分の生き方を見つめながら、そういう知恵も持つことがこれからの女性には必要ですよ。

介護を学ぶ 若者は？

「歴史的重みのある言葉を
話されるお年寄りが
たくさんいて、
非常に勉強になります」

ひとし
後藤 仁さん(33)

静岡県立大学短期大学部
社会福祉学科
介護福祉専攻1年生



介護の現場ではこれから多くの
優秀な人材が必要とされます。

介護を学ぶ学生はどんなことを考えているのでしょうか。
製薬会社で八年勤務した後、県立大学に入学、
介護を専攻している後藤仁さん取材しました。

人とのかわりのある仕事を

介護保険が話題になった頃からだんだん「介護」に興味を持ち始めました。その後は主に書籍を通してですね。三好春樹さん(特別養護老人ホームの生活指導員を経て現在は年に百五十もの講演をこなす。介護に関する著作多数)などの本を読んでも、お年寄りがながろにされている様々な事実を知り、これは何とかしなきゃいけないという思いにかられました。製薬会社のお客様は本当は患者さんですが、会社にいると患者さんとふれあうことは全くないんです。誰のために仕事をしているのかが見えづらくなって…。人との関わりのある仕事に魅力を感じました。一方で、研究職からデスクワークに移ったことで精神的な負担が大きくなり、それがきっかけで人生を見つめなおしたら、介護のほうがより社会に貢献できるのではと思いました。

真剣に学ぶ学生たち

授業は朝から夕方まで非常に過密です。先生の多くは現場を経験してきているので、本の文字だけじゃない実感を味わえますね。

高校から来た学生は、講義はちゃんと出てくるし、ノートもしっかりとって質問もするし、すごくまじめでびっくりしています。一番驚くのは授業中に携帯が鳴らないことですね。志望の動機も、おじい

ちゃんやおばあちゃんを介護した経験があるとか、施設でボランティアをして介護の職員がすごく印象に残ることをしたとか、あるいは、逆にすごく問題意識を感じ、使命感をもって来ている、若いのにすごいなと思います。

一年生は五十四人中三人が男性です。実際の現場では男性の手がすごく必要で、もつと増えなくてはいけないと思います。力を使うような場面がありますし、男性が男性を介護するほうが好ましい場合もあります。

現場の問題をしっかりと見極めたい

今はお年寄りの介護が一番興味があります。自分の経験を積むという意味でも老人福祉施設での介護職員としてまずはやってみたい。どういう問題があるのかしつかり見極め、改善するために自分にできることを考えたい。残念ながら病院みたいに白い壁でパイプのベッドの施設がまだあつて…。生活の雰囲気を感じられないのです。生活をしたくなるような空間を作り上げなければと思います。

会社を辞めるときは
非常に悩んだという
後藤さんですが
自分なりのライフステージを
着実に歩んでいます。



介護を志すきっかけとなった三好春樹さんの本
「専門バカにつける薬」平成4(1992)年筒井書房

取材を終えて

日本の65歳以上人口は2331万人（2002年4月現在）、総人口の約18%にあたります。推計によれば2050年には、65歳以上人口は総人口の35.7%に達するという事です。高齢化が進む中、社会全体で介護を支えようと、2000年4月介護保険制度がスタートしました。しかし、主な介護者の72.7%が女性であるという調査結果もあるように、家族の中で女性が1人で担っている現実があります。

高齢社会を迎える日本、「介護」は誰もがかかわる問題です。そこで特集では、「自分の生き方の中でどう介護と向き合っていますか？」をテーマにとりあげました。

「介護」とは、自分だけでは日常生活の自立ができない、他の人の力を必要とするということですが、介護をする側、される側のそれぞれの生き方を大切にすることはどういうことなのか、どう家族や社会の中で共に生きていけばよいのか、自分自身の生き方の中でどう「介

護」と向き合うのか、という視点で探ってみました。

家庭や職場や地域で、男女を問わず誰もが皆いろいろな立場を背負って社会生活を送っています。1人で介護を背負わないで、周囲の人たちの協力を求め、介護保険制度のサービスも活用することで、介護をしながら自分の生き方も大切にすることが出来るのではないのでしょうか。

取材を通して、介護は自分自身の生き方を問われることなのだ改めて感じました。また、人との関わりを抜きには介護は考えられないことから、家族やまわりの人たちとの日ごろからの関係も大切にしながら、自分自身の毎日を丁寧に真剣に生きることが、突然介護に直面することになっても、うろたえないで介護を家族で受け入れ取り組んでいけることにつながるのではないかと思います。

（ねっとわあくレポーター）

電話相談

静岡県高齢者総合相談センター

静岡市駿府町1-70静岡県総合福祉会館内
TEL 054-253-4165

ぼけ(痴呆)老人を抱える家族の会

すぎなの会/富士市本市場

連絡先 TEL 0545-32-0370

さくら会/富士宮市豊町18-5

富士健康福祉センター富士宮支所内
TEL 0544-27-1131

浜北市痴呆性老人を抱える家族の会

七色の会事務局/
TEL 090-4263-1171

きずなの会 事務局/静岡市城内町1-1

静岡市社会福祉協議会内
TEL 054-254-5213

先進国の中でも急速な伸びを見せる日本の高齢化

内閣府「2001年度高齢化の状況及び高齢化社会対策の実施の状況に関する年次報告」より

